

「誰も見捨てない町」

— 2 稿 —

2026/4/5

米俵

〈人物表〉

蓮見 誠 (23) 新人警察官

弓削 達也 (38) 誠の先輩・警察官

安達 孝 (68) 白輪町の住民

住民 A

住民 B

住民 C

子ども

小学校高学年程度

1. 白輪町・商店街（昼）

昭和感のある商店街。程よい人込み。
街頭スピーカーからは白輪町ソングが流れている。
親しそうな雰囲気のお店とお客。店主が笑うとそれ
につられたように客が笑う。
その笑いは隣の店へ、通りを歩く人へと、波紋の様
に不気味に広がっていく。
街頭スピーカーの声「犯罪ゼロの町。白輪町。みなさんのご協力
に感謝します」

2. 白輪町・住宅街（昼）

二台の自転車が走り抜ける。
先頭に行く蓮見誠（23）、真新しい制服姿。
誠、確かめるように後ろを振り向く。
弓削達也（38）、落ち着いた様子で誠に続く。
弓削 「誠、道分かってんのか？」

誠 「この先を右に抜ければ、早いですよ」
と、迷いなくハンドルをきる。

弓削、疑うように、
弓削 「本当にこっちか？」

3. 白輪町・安達家前（昼）

誠、インターホンを押す。弓削、側で見守る。
間髪入れず、玄関のドアが荒々しく開く。安達孝（
68）が出てくる。
安達 「おっせーんだよ」
誠 「白輪交番の蓮見です。通報を受けて伺いました」
弓削 「同じく弓削です」
安達、弓削を見て、怪訝な顔。

安達 「また、お前か……」
弓削、安達から視線を外す。

誠 「どうされましたか？」
安達 「だから、電話でも言っただろ。不法侵入だよ」

誠 「何か、被害が？」

安達 「ゴミが戻ってんだよ」

誠 「え？」

安達 「朝出したゴミが俺のところに戻ってきてんの」

誠、ゴミ袋を確認。ゴミ袋には4/13AMの文字。

誠 「このゴミ……ですか？」

弓削 「出し忘れたのではないですよね？」

安達 「ちげーよ」

と、声を荒げる。

安達 「ここに日付書いてあんだろ。これは今朝出したって意味だよ」

示し合わせたように近所の人が変わらわらと出てくる。
全員、口元に笑みを浮かべている。

安達、その様子を見て舌打ち。

住民A、誠に会釈する。誠、笑顔で返す。

住民A 「ありゃ。安達さん、また忘れちゃったんだ」

住民B 「大丈夫ですよ。また、私たちが片付けておきますから」

住民C 「みんな心配してるんですよ」

安達家の敷地へ近付いていく住民たち。

安達、声を荒げて、

安達 「お前らだろうが」

誠、安達を制止する。

誠 「安達さん、落ち着いて下さい」

弓削、住民たちに向き直って、

弓削 「宜しければ、あちらで少しお話聞かせてもらっても良い
ですか？」

と、穏やかに促す。

住民たち、抵抗もなくなっていく。

誠、その背中をジッと見る。

安達 「気持ちわりー顔しやがって」

誠、その声に勢いよく振り向く。

安達 「おい、お前。新人か？」

自分の服をつまんで、

誠 「……制服が。バレちゃいますね」

安達 「……あいつらには気を付けろよ」
誠 「どういことですか？」

住民が窓から安達家を見ている。

安達、それに気付き、**誠も同じ方向を見る。**

安達 「……なんでもない」

誠 「安達さん？」

安達、玄関の中へ引っ込む。

誠、閉まりかけたドアを止める。

誠 「こついうの、見過ごせないんで。何かあるなら——」

安達 「うるさい。聞く相手間違えてんだよ」

と、ドアを勢い良く閉める。

誠、閉まったドアを見つめる。

4. 白輪町・交番・執務スペース（夜）

弓削、ノートパソコンで報告書を作成している。誠、向かいに座って**書類**を見ている。

誠 「報告書なら、俺、書きますよ？」

弓削、キーを叩く指を一瞬止め、

弓削 「……いや、大丈夫」

誠 「安達さん、**何度か通報**してるんですね」

弓削 「**認知症**だっただから、また呼ばれるかもな」

誠、弓削に鋭い視線を向けて、

誠 「それ、決めつけていいんですかね？」

弓削の手が止まる。

タイプ音が消え、静寂。

誠 「先輩、どう書いてるんですか？」

カーソルが白紙の上で、心拍のように**点滅**。

少しの間。

誠、立ち上がった近付こうとする。

弓削、パソコンを閉じようとする。

女性の声「あのー……すみません」

誠、入口へ向かう。

× × ×

弓削、難しい顔をして、パソコンを見つめる。

deleteボタンを押す。

画面の文字が消えていく。

そこへ誠が戻ってくる。

弓削、ノートパソコンを閉じる。

誠 「終わりました?」

弓削 「ああ……」

と、視線を外す。

誠、弓削を見つめる。

笑顔で、

誠 「俺、パトロール行ってきましたね」

5. 白輪町・商店街(夜)

シャッターの閉まったお店が並ぶ。どのお店にも「犯罪ゼロの町」と書かれたポスターが貼られている。誠、ゆっくりと通り抜けていく。

白輪町ソングを口ずさむ。

6. 白輪町・安達家前(夜)

パトロール中の誠。

安達家、電気が消えている。

誠、少し離れたところに自転車を止め、安達家を見る。

(小学校高学年程度の)子どもが、安達家に近づく。

手にはゴミ袋。

子ども、ゴミ袋を安達家の敷地へ投げ入れる。

誠、急いで近付き、

誠 「おい、どうした?」

子ども、不思議そうな顔。

誠 「今、なんかした?」

子ども、誠をジッと見て、

子ども 「……みんなやってるから」

子どもの口元に笑み。

子ども、誠をジッと見る。

子ども 「おまわりさんも……でしょ?」

誠、ハンドルを強く握る。表情は見えない。

7. 白輪町・交番（朝）

誠、伸びをしながら執務スペースから出てくる。

既に待機している弓削に近付いて、

誠 「天気、いいっすね」

住民B、慌てた様子で走ってくる。

息をきらして、

住民B 「あの、すみません」

弓削 「どうされました？」

住民B 「あの……安達さんが——」

弓削、飛び出していく。

誠、その背中を無表情で見つめる。

8. 白輪町・交番・執務スペース（夕）

夕日が差し込む。

誠、コーヒーマシンの準備をしている。

弓削、パソコンの前に座っている。

誠 「ブラックですよね？」

弓削 「ああ……」

誠 「心不全、ですか」

弓削、無言でタイピング。

誠、コーヒーマシンを持って弓削に近付く。

誠 「先輩、マジでそれ俺がやりますよ」

弓削、手を止めて、

弓削 「いいから」

と、パソコンを閉じる。わずかに手が震えている。

誠、弓削にコーヒーマシンをかける。

弓削 「あっつー！」

誠、その隙にパソコンを奪う。

弓削、取り返そうと立ち上がり、掴みかかる。

誠、その勢いを利用して弓削を床に叩きつける。

弓削、苦しそうな表情。

誠、パソコンを開き、画面を見つめる。

誠、大きく溜息。

表情がスツと温度を失う。

誠 「これじゃ、ダメでしょ」

弓削、驚いた表情で、

弓削 「……お前」

誠 「先輩も分かっているでしょ？」

弓削、目を逸らす。

誠 「安達さんまで……」

弓削 「ちがっ——」

悔しそうに、

弓削 「お前、人が死んだぞ」

誠 「知ってますよ……」

弓削に言い聞かせるように、

誠 「だから、この町はゼロなんですよ」

弓削の手をとる。力を入れない。

弓削、ためらう。

外から、笑い声。

誠、その音に耳を傾ける。

誠 「ほら、みんな、そうしてますよ」

弓削、震える指で、deleteキーを押す。

9. 白輪町・土手(昼)

二台の自転車が走っている。

先頭は弓削。疲れきった表情。

その後ろに誠。

誠 「せんぱーい」

弓削、無視する。

誠、軽くベルを鳴らす。

弓削、ビクっとして、軽く後ろを振り返る。

口元だ
けで笑顔を作ろうとする。

誠、住民と同じ笑顔。

独り言のように、

誠 「……すぐに慣れますよ」

遠くの方から街頭スピーカーの声。

街頭スピーカーカーの声「ありがとうございます。犯罪ゼロ。継続中
です」

(おわり)